

# ART KISS

*Contemporary Art Museum, Kumamoto*

# LETTER

FOR KUMAMOTO

ART PEOPLE

vol.

12

2002.6.15 熊本県現代美術館発行



# WORLD NEWS

シドニー・ビエンナーレ Biennale of Sydney 2002



Simryn Gill <A Small Town at the Turn of the Century> 1998-2000



Olaf Nicolai <Portrait of the Artist as a Weeping Narcissus> 2000

オーストラリアのシドニーで「シドニー・ビエンナーレ」が始まりました。(5月15日～7月14日)。今回のキュレーターはイギリス出身のアーティスト、リチャード・グレイソン。「(THE WORLD MAY BE) FANTASTIC」というテーマも皮肉たっぷりですが、フィクションやフェイクをキーワードに、現実に対するもうひとつの仮想現実を作り出すアーティストの作品が並べられました。

[アート・ド・ギャン]  
**ART DE GYAN**

**熊本県立美術館本館・分館**

熊本市千歳城町2-18 ☎351-8411

●「第24回熊本県日本画協会展」(4.2~4.7)日本画・水墨画ともにレベルの高い作品が並んだ。山下真由美さんの《まつりの後》は、麗かなデッサン力が光る。(A・S)



山下真由美さんの作品《まつりの後》

●「第4回かな書道研究白梅会展」(4.2~4.7)玉名在位の大橋永佳さんが主宰するかな作品研究会の3年に1度の発表会。37人が軸巻、額装、折帖など各1点を出展。主宰者の細字作品には覚えがうかがえ印象に残った。会員への指導も行き届いている感があり、全体的にレベルが高いと思った。(T・M)

●「花の会阿蘇支部写真展」(4.9~4.14)四季の瑞々しい花々をとらえた写真展。風景を中心とした写真研究会「無名塾」展もあわせて行われた。(A・S)

●「第42回白梅書道会展」(4.9~4.14)平安中期の国宝(西本願寺本三十六人集)は、切り継ぎや、破り継ぎ、重ね継ぎ等の料紙の美しさもすばらしい。その美しい料紙に、役員32人が36点を丹念に臨書して、茶掛けに仕上げている。中村天香会長は《素性法師集》を、副会長の田内研水さんは《柿本人集》、同じく那須球石さんは《源信明集》を書いた。他に創作の大作も額や屏風等で約220点展示。

●「第30回阿蘇会書道展」(4.16~4.21)翠嶺会員31人が楷書や行草書、調和体書等で書いた軸や額61点を展示。野口翠山会長は、安らかな生活を望む《沈石田詩》を全紙に書き、川津翠芳副会長は、芭蕉の《奥の細道依立より》を調和体で書く。島田洋翠さんは、坂村真民詩の《花》を衝立に、須崎海園さん、江上蒼龍さんが賛助出品。(S・K)

●「根菜道夏目陽介展一朱と黒のシンフォニー」(4.16~4.21)刷毛目のあいだから地色かのぞく仕上げに、単なる漆器にはない野性味を感じた。

●「第19回真実展」(4.16~4.21)日展・日洋展を主体とするだけあり、具象の大作が並んだ。

●「写真と工芸二人展」(4.16~4.21)一番ヶ瀬尚さんの全国の古塔を丹念に撮った写真と、妻の寿子さんの草花と幾何学模様を配した、華やかな七宝による二人展。対照的にもみえるが、それぞれが麗かな世界を持っている点が素晴らしい。

●「第6回日本画グループ展」(4.23~4.29)風景や植物など29点。対象にむける真摯な姿勢が垣間見える。

●「江原写友会作品展」(4.23~4.29)上原隆さんの《鴻をおえて》は、仕事を終えて浜辺に佇む少年にむけた、優しいねざらいの服差しが感じられる。

●「江原展」(4.23~4.29)「兵馬備(へいばよう)」をテーマに、会誌を効果的に配し、迫力ある大画面を構成した。(A・S)

●「第38回近代詩文書作展」(4.23~4.29)井上享子さんが主宰する近代詩文書研究会員13名が、漢字やかなの古典の勉強を創作に結び付けようと試み、それぞれ臨書と創作作品を発表。特別コーナーに井上さんの

師匠で文化勲章受賞者である金子蘭亭さんの作品が多数並べられたのは圧巻であった。(T・M)

**アートルーム イケオ**

熊本市新市街6-6 ☎324-1414

●「『面』展第二高校OB展」(4.3~4.8)油彩・版画・彫金・ビデオなど、それぞれの世界で活躍中の第二高校美術科22期生の9人の作家によるグループ展。(K・T)

**喫茶りんどう**

熊本市水前寺6-18-1熊本県庁本館1F ☎383-1111(内線5820)

● 明星学園の方々による、かざらと木の葉と草で編んだ草履などを組み合わせたリースを展示。(Y・H)



明星学園の留さんの作品

**アーツスペース大宝堂**

熊本市上通5-6 ☎354-2155

●「第14回雲明書道会書作展・第7回雲の会書作展」(4.3~4.7)大道書道院熊本支部長の荒本繁明さんが指導する30人が、軸や額で48点を展示。荒本さんは甲骨文や篆書、調和体等で大作もあり、6点を額や屏風で見せる。他は、楷書や行草書体等で、素直な明るい作品である。(S・K)

●「第21回真実展」(4.10~4.15)26名による油絵の展覧会。栗林八郎さんの《山の風景》は、すがすがしい山の空気まで描ききり、傑作。海を描いた松浦桂子さんの《緑の中》も印象に残った。

●「中津由美子刺繍研究室作品展」(4.17~4.22)現代ではめずらしい工房制で、中津由美子さんのデザインを、研究室の会員の方々が一針一針丁寧に仕上げている。中津さんのデザインの美しさは言うまでもないが、会員の方々の誠意のこもった技術があつてこそ、できあがる作品なのだろう。素材感が素晴らしい、作品そのものが持つ迫力を感じた。

●「鹿大付園小学校PTA美術クラブ絵画展」(4.24~4.29)20名による全45点の絵画展。坂本宣子さんの《桜の頃》は桜の木の前に立つ二人の中学生くらいの女性を描いたもので、広い空間を感じさせていた。(K・K)



坂本宣子さんの作品《桜の頃》

**ギャラリーキムラ**

熊本市水前寺3-5(上通KビルB1F) ☎327-0166

●「尾崎玲子クレイワークス」(4.1~4.7)太宰府在住の尾崎さん。深海生物の触手を思わせる胸の筒が印象的。オブジェにも花器にも二重丸。

●「アートクラブ寺子屋&仲間展」(4.8~4.14)菊川石巨さんの透明感あふれる女性像が光る。

●「小川亮野 13月の鉛筆展」(4.15~4.21)連綿なスケッチはもちろん、それに添えられた独特の書き文字が小川さんの人となりを表すかのよう。感情に流されることなく、素朴と洗練とが調和している。

●「橋本隆吉・高木博英二人展」(4.22~4.30)油彩の迫りを感じさせる展覧会。橋本さんの《純立》が、建物の矩形を俯瞰で描くことで、その空間におけるマスを表していたのに対し、高木さんは牛骨に文字通り正面から取り組み、表現を展開していた。(A・S)

**鶴屋百貨店**

熊本市手取本町6-1 ☎356-2111

●「新伝木版画の巨匠 牧野宗則木版画展」(4.3~4.9)自刻自刷の華麗な多色木版画。

●「生命旭日 絹谷幸二作品展」(4.10~4.16)高士山などの小品や人物の大作など、絹谷幸二さんの華やかなアフレスコの世界。(K・T)

**上乃園の一軒家**

熊本市上乃真通り

●「たったひとつ展」(3.30~5.6)古原尚子さんと森川尚美さんのユニット、「naono's」の作品展。草木に埋もれた民家を借り切り、展示。所狭しと並べられたバッグ、服、時計などオリジナルグッズにも楽しいアイデアが光る。ビニール、プラスチック、ナイロン布、紙などなど、多様な素材をこれまた多様な技術で自由に加工。作っても作っても尽きない創作意欲に脱、次の展覧会が楽しみだ。(K・K)



「たったひとつ展」展示風景

**島田美術館ギャラリー&島田美術館蔵寸簡冊**

熊本市島崎4-5-28 ☎352-4597

●「『花』と『映』横山博之×長嶋康雄展」(4.4~4.16)横山さんの花シリーズは今回が初めての試み。繊密な描写と軽やかなタイトルで見せるものを楽しませつつも、横山さん自身、花を描くことで、光という媒体に強く興味を持ったと語る。今後の作品にどのように映されていくのが楽しみ。長嶋さんは立体と平面の作品を展示。平面作品にも空の間に映る光への興味が見られ、立体作品には白に映る色彩への興味を感じられた。



横山博之さんの作品《2002年2月10日の陽光》



## ギャラリー一萌

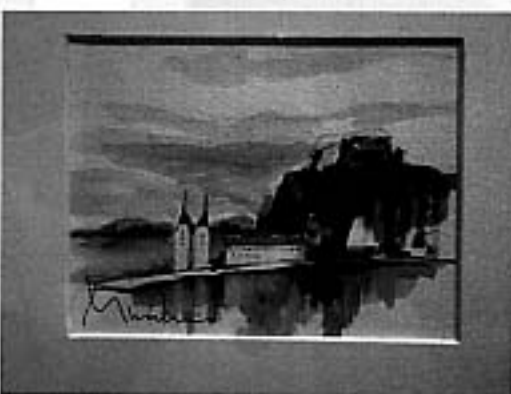
熊本市水前寺6-27-20 ☎383-7001

- 「桜花会展」(4.15~4.30)は熊本市役所絵画部8と部員による18名が出品。柔らかな色調の作品が並んだ。(Y・H)

## 画廊喫茶三点鐘

熊本市手取本町3-8有明ビル ☎328-3040

- 「水彩の路ヨーロッパ5th西真展」(4.1~4.8)市上りの温気を写し取ったかのような水彩画が並ぶ。豊かな色彩感覚をみせる作品の合奏の《島の館》という、墨1色の作品がかえって目を引いた。



西真聖さんの作品《島の館》

## カフェ・ディレクター

熊本市上通町10-7セブンウィングN2・3F ☎359-2833

- 「カフェ・ウィーク」(4.12~4.21)福岡、長崎、熊本、の8つのカフェが連携して開催する企画、カフェ・ウィーク。そのイベントの一つとして同カフェで開催された、手づくりクリエイター達によるTシャツやイラストの展示。継続的な開催が望まれる。(K・K)

## ジェイ

熊本市大江本町6-9(味噌天神電停前) ☎372-8732

- 「一村三三の人形仏展」(4.1~4.10)なんともほっこりとした表情の一村さんの仏さま。愛嬌たっぷりのお顔に、浮世のささくれも忘れ、心なやました。



一村三三さんの作品

- 「アイビーの会第6回近作展」(4.22~4.30)ジェイを中心とする絵画サークルの展示。栗崎英男さんの《スペイン風景》《ベニス風景》は、抜群の筆さばりで街の空気を爽やかに写し取っていた。(A・S)

## ギャラリーカフェ プリランテ

熊本市桜木2-14-5 ☎369-0095

- 「写図われもこう 第5回写真展」(4.1~4.15)野山に足踏く通う者だけが知る、ひっそりと咲く美しい花の、その奥ゆかしく可憐な様子を優しく写し取っていた。
- 「武原和子パッチワークキルト展」(4.16~4.30)暖色系の色彩を中心に選んだ、見るものをほっとさせるパッチワークが並ぶ。輸入りの作品も色使いのセンスの良さを見せていた。(H・T)

## 画廊喫茶南風堂

熊本市北千反畑町5-13老建ビル1F ☎343-9684

- 「開店16周年記念展Part1・Part2」(4.1~4.20)各15人、あわせて30人の画家たちがこの記念展に出品。中では谷盛敬二さんの《STILL LIFE—An apple—》が清潔な空間を拓き、印象に残った。
- 「北原房展」(4.21~4.30)くすんだ色合いがふと懐かしい気持ちを喚起する、北原房さんの絵画。ハガキに印刷されたものではピンとこなかったが、絵の前に立つと魅力がわかる。《野の花》など、対象を見る目の優しさを感じさせた。(K・K)

- 「人吉情景福田正邦個展」(4.10~4.14)人吉の風土を感じさせる作品が並ぶ。

- 「城武信淡彩小品展」(4.16~4.21)旅先で仕上げたという0号サイズの風景画には構図のまとまりがみられ、アッサンカの高さが感じられる。そのような作品の中に、松茸や屏の絵があったが、城さんオリジナルの世界を強く感じた。

- 「匂の会展」(4.24~4.29)託麻市民センター絵画教室の作品展。松永千代子さんの《静物》は、色彩感覚のよさを感じさせた。(H・T)

## 県立図書館

熊本市出水2-5-1 ☎384-5000

- 「ルーテル学院高校書道部展」(4.1~4.14)ルーテル学院高校書道部員の作品発表と、同校での芸術科書道の授業における提出作品を並べた書道展。授業における1年生の《蘭亭叙》、2年生の《風信帖》の臨書作品からは、比較的真面目な学習態度がうかがえたし、部員の作品は、高文連の出品作が良くまとまって変定していた。(T・M)

- 「熊本聖学校生徒作品展」(4.16~5.12)今回の展示は陶芸作品。動物を象ったじょうろのシリーズが面白い。ほんたたくやくんの《らいおんのじょうろ》、おがたまさくんの《わにのじょうろ》など、思わず笑わされてしまう、とほけた味がある。他にも美しいテリインの《しんかんせんのかみ》(いちまるこういちくん)など、佳作ぞろい。

- 「熊本市立西山中学校選択美術作品展 アンネのぼら展」(4.16~5.12)同校に咲いたバラの花をモチーフにした、ポスターとシンボルマークの作品展。今村将太さんのシンボルマークは、調和のとれたデザインで目

## 熊本伝統工芸館

熊本市千歳城町3-35 ☎324-4930

- 「天草陶器フェスタ2002」(4.2~4.7)の中でも、次代を担う20-30代の青年グループ「天草陶器会」では、天草のやきもの新たな可能性に挑戦している自由な造形が好ましかった。

- 「吉良圭 結更紗展」(4.2~4.7)結更紗とは、古く伝わった更紗の文様の一部を必ず作品の一部に取り入れるもので、好きな絵柄と組み合わせながら、ハンカチから器まで多彩な作品がみられた。

- 「木の作り出すやわらかな空間」(4.9~4.14)は、上妻義剛さん制作の家具展で、椅子のフォルムに緊張感が保たれていた。

- 「東祐一 黒薩摩焼作陶展」(4.9~4.14)

- 「古賀孝子制作者人形展」(4.10~4.14)は、ゆっくりと手をかけてきた温かみのある作品。

- 「桜屋くしの器展」(4.9~4.14)は、阿蘇久木野窯の伊比井宣明さん、万貴さんによる季節にあわせた器の器が並べられ、そのディスプレイも洗練されていた。

- 「松永儀 藍染白展」(4.16~4.21)は、金箔も取り込んだ表現を試み、更に豊かな世界がみられた。

- 「木による和の意匠・2人展」(4.16~4.21)は、これまで洋風のデザインを主に制作してきた中山真根さん、守山崇賢さんが、今回は「和」をテーマとして、和の家具や日用品の機能や形態を生かしながら、現代の生活にも取り込めるデザイン作品を提案した。

- 「陶祥繁 福岡祥浩作陶展」(4.16~4.21)

- 「大野勝彦やまびこ監製の手紙展」(4.16~4.21)どの絵手紙からも、日常を見つめ、日々描くことの辛さが画面にあふれていた。

- 「ギャラリー和楽庵 暮らしの工房展」(4.23~4.29)では作陶の中里鉄也さん、中川自然坊さん、和具の松岡伸也さん、工房の橋村時生さんらによる作品。

- 「佐野信子帽子展-オリジナル型もの帽子-」(4.23~4.29)では、素材から自由にイメージを膨らませて形づくられた、軽やかな帽子の作品。

- 「仏像展」(4.23~4.29)下田祥浩さんらによる木彫同好会の方々の、心を込めて丁寧に彫られた仏像で、仏に向かう安らかな時間を感じた。(Y・H)

## 画廊喫茶ぶらうん

熊本市花畑12-15 ☎352-8855

- 「第2回陶芸作品展即売会」(4.15~4.30)平均年齢69才という花器陶遊会の皆さん。花器や鉢、香炉などの陶器を中心に油絵やオブジェまで、所狭しと活気あふれる展示となった。(A・S)

## ギャラリー喫茶去

熊本市千歳城町3-7 ☎359-0132

- 「ハーブ&クラフト工房 香り畑」(4.9~4.14)中原ゆう子さんによる、ハーブ染めの布を使ったアクセサリーなどの展示。

- 「林典子日本画展」(4.16~4.29)林典子さんの作品は、花や人、鳥を描くが、対象そのものより、対象が網膜に残す影を追っているようである。崇高な印象を受けた。(K・K)

## 熊本岩田屋六階美術画廊

熊本市板町3-22 ☎322-1111

- 「海と帆船のロマン—海洋画・帆船展」(4.3~4.8)では、光あふれる水面と講れやかな帆船の作品が並んだ。

- 「オールドマイセンとオールヌーヴォー展」(4.16~4.22)ではマイセン、KPMなどの磁器とガラスなどのランプの展示。(Y・H)

## 四季の彩

熊本市上通4-10トラヤビル ☎351-8332

- 「三面画」(4.2~4.30)三人がギャラリーの三面の壁を使って展示することからこの展覧会名がついたという。チューリップをモチーフに空間構成する本田耕治さん、パステルを用いて花などを描く平岡博幸さん、同じくパステルで女性を描く岩尾和之さんの発表。(K・K)



LADY BOYD  
SUSHI & CHIPS



松尾北小学校の皆さんと

さる5月20日(月)、熊本市現代美術館イベント第9弾として「ジュリア・ボイド講演会:Sushi and Chips - 英国の中の日本文化」を開催いたしました。ハンセン病患者救済に生涯をかけたハンナ・リデルのお話から、現代の美術にいたるまで、イギリスと日本の深い文化のつながりを、幅広くそしてエネルギッシュにお話していただきました。また、翌21日(火)は、松尾北小学校の皆さんと交流会を行い、児童の皆さんの明るく元気な合唱と、神楽の舞いという真心こもったプレゼントに、ジュリアさんは大感激でした。



株式会社泉洋服店 代表取締役

## 泉 冬星 さん

Tousei Izumi



この連載では、熊本にお住まいで、様々なジャンルで活躍されている方々に、活動による熱い思いを語っていただきます。第11回は泉洋服店社長、泉冬星さんに楽しいお話を聞きました。

略歴／1976年度熊本大学法学部卒業後、ロンドン滞在。第4代泉洋服店を継ぎ、1986年代表取締役就任。上通商會会長。

—— 老舗というのは100年以上の歴史を持つ店のことをいいますが、泉洋服店は今年ですでに創業112年を迎えるそうですね。

泉：私にとって曾祖父にあたる初代が生まれたのが1868年。慶応年間から明治へ移行する時代でした。西南戦争が10歳のとき、突如包まれた熊本城を御船町本倉から眺めたといえます。横浜で洋服の勉強をして、明治23年(1890年)に洋服店を開業しました。二代目の泉一郎は非常に優秀だったので、洋服屋の跡継ぎとして、ニューヨーク、そしてロンドンに4年間も単身留学したんですね。排日色が強かった時代でしたから大変だったろうと思います。修行を終え、テイラー・カッターの技術を身につけて帰国した後、大正14年に、曾祖父が同郷の御船出身で、帝大出身の建築家増永茂己氏に建築を依頼し、今の泉洋服店ビルの場所に移転しました。もともとは職人系不世帯の生家だったところですが、でもそのすぐ後に昭和の大恐慌。人知れぬ苦労もあったはずなのに、残っている当時の日記には一言もそのグチがない。昭和3年には昭和天皇即位式にあたって、熊本区大の山崎正直氏のために大礼服を作るのに、失礼があつてはいけなと、何度も東京に通って裏物を調べているんです。頭が下がります。そして、三代目、私の父ですが、泉島が避いてしばらくすると昭和28年の大水害。ロールで買い置きしていた舶来産の生地が全て駄目になったり、本当にいろいろありましたね。老舗四代目としてプレッシャーはもちろんありますよ。さきの三代がアメリカやイギリスの最先端の生きた技術を学ぼうと、海外に渡ったダイナミックな人たちでしたからね。今年で112周年を迎えますが、彼らの視野の広さと行動力には、身内でありながらただただ尊敬の一言ですね。

—— 熊本の近代文化史そのものですね。

泉：そうそう、海老原喜之助のもとで先代が絵を習っていたんですよ。当時はうちがエビ研助党部の学び舎で、私もそこで絵の勉強をしたんです。指導にあつた先生は乙葉先生でしたが、海老原先生はとても優しく、店に遊びに来られると私を抱っこそのまま、長崎書店に直行して絵本を買ってくれました。先生のワインの匂いと、じゃりじゃりしたあの足の肌触りは今もよく覚えてますよ(笑)。

—— 歴史ある上通にびぶれず熊日会館がオープンし、市の現代美術館もできました。これから上通はどのような変化をとけていくのでしょうか。

泉：もともと「上の通」は、武家屋敷の並んだ通りでした。西南戦争で焼け野原になった後に、商店街になったのですが、唐人町、新町に対抗した新興商店街で、先達であります大谷宗器さん、舒文堂さんをはじめ、この通りとともに生きてきたという感があります。びぶれずや現代美術館のオープンが、街にとってのビック・イベントだと思います。小売店舗、文化施設、宿泊施設がいつべんに新しく加わったことで、人の流れが大きく変化するでしょう。私は新しく2つの回廊が生まれ出されると思います。「商の回廊」これは左回りで上通、上の裏、びぶれずをつなぐコースです。「美の回廊」これは右回りで県立美術館、伝統工芸館、現代美術館をつなぎます。以前ブリュッセルを訪問したとき、街のいたるところに美術館があって、いくつあってもいいものなのだと思えました。街に滞在し、暮らすように楽しむ。単なる観光目的の一過的な場所ではなくて、心がほっとする滞在型の街、味わいある風景の街になっていくことを望んでいます。

—— 上通は今も成長しているということですね。

泉：上通のイメージについて、以前アンケートを取ったことがあるんです。そうしたら、「面白い」とか「古臭い」とかの返答で、文化の色濃いモダンな地域だと思っていたののがっかり。高観的なイメージをつきつけられましてね。そのアンケートをもとに、先輩方の理解と若い世代のアイデアによって、上通はすっかり若返ったんです。今も裏道に入ると若い人たちがどンドンオリジナルの店を展開しているでしょ。歴史はありますが、これからが青春期だといいたいですね。

—— 泉さんが今、注目していることは？

泉：ひとりの人の手による高度な技術というものが、どんどん失われてきています。柳宗悦の「手仕事の日本」を読み、今さらながら職人技を守り、育成することの重要性を感じました。熊本の文化も絶滅の危機にあるものがたくさんある。絶滅種は動物だけじゃないんです(笑)。街のなかできちっと自分の仕事をして、文化継承者として生きているひとりの無名の人に光を当てることが、町の流れに大きな変化をつけるアイデアを生み出すきっかけとなることもあるでしょう。それぞれの店には、それぞれの深みのある物語が蓄積されています。そういう部分をもっと紹介していきたいですね。

—— ありがとうございます。

## 今月の展覧会

- パリ カルティエ財団 [村上隆展] (6.26~9.29)
- ニューヨーク ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート [リー・ブル:Live Forever]展 (5.16~7.7)
- フランクフルト クンストフェアイン社 [マニフェスタ4] (5.25~8.25)
- カッセル 「ドクメンタ11」 (6.8~9.15)
- 福岡アジア美術館 (092-263-1100) [第2回福岡アジア美術トリエンナーレ2002] (~6.23)
- 北九州国立美術館 (093-382-7777) [シアトル美術館からの聖徳り 近代の京都西増展] (6.22~7.28)
- 坂本晋三美術館 (0967-46-5732) [東京都現代美術館コレクション 現代美術の体験] (6.20~9.1)
- 鹿児島市立美術館 (099-224-3400) [第49回県美展] (6.13~6.23)
- 大分市美術館 (097-554-5300) [大分現代美術展2002 アート循環系サイト] (~7.14)
- 熊本県立美術館 (096-352-2111) [西洋絵画の400年 東京富士美術館珠玉のコレクション展] (~6.23)

## 今月の4コママンガ

### ヘンゼルとグレーテル



イラストレーション:ぼとうあやか

## 編集後記

サッカーの世界カップも後半戦を迎えました。日本チームも頑張りました(もつとも、これを書いているのは6月2日なのですが)。しかし、それ以上に感動を与えてくれたのが、あの村中でカメルーンチームを待ちわびた大分中津江村の皆さんでした。都会の人間もてなしの態度と根本的に異なる、大らかにして、けげな人間のありよう、つまり、「村」でなければ生まれ得ない態度の強さに、感をつかれたのです。小さな村の、村民の誇りとする美術館。熊本市現代美術館もそうありたいものです。

(学芸課長 西萬 宏)

### 寄稿者紹介

#### 兼城 昌山 (S.K)

Shazan Kaneshiro

書については、自分なりの表現で、自分の懐を持つ作品が出来るようにと、日頃の制作に励むしかないのである。

#### 森山 淡草 (T.M)

Tanso Moriama

世界的なピアニストのマルタ・アルゲリッチが「芸術家の前奏は学校の先生とは違う」と言っていた。年輪、厚味を思わせる彼女の演奏には、その説得力がある。其大の、音色透明でいかにも正確という教科書的な前奏と対照的で印象深かった

#### 田代 晃三 (K.T)

Kezo Tashiro

モダンデザインのあのひょうひょうしたタッチの、一度慣きの両面になぜ惹かれるのだろうか。

### 学芸員紹介

#### 本田 代志子 (H.D)

近頃は、くちなしの香りに出会うことが少なくなり、ちよっと残念です。

#### 蔵座 江美 (S.S)

雨が似合う花No1の紫陽花。紫にはかたつむりを添えて。

#### 金澤 韻 (K.S)

10年前には想像すらしなかった、インターネットづくりに夢中です。10年後にはどんな職業が盛況なのか?

#### 坂本 顕子 (K.S)

九州びんごをみに韓国へ、作品はもとよりオモシロいのパワーに注力。

#### 斎藤 治子 (H.T)

ジュリア・ボイダさんの、真朝とした性格と、潮とした物語に、作家の理想像をみました。素敵!

発行元/ART KISS LETTER アートキッス・レター Vol.12 2002年6月15日発行 ©無料

編集人/田中 幸人

編集長/西萬 宏 担当/斎藤 治子

印刷/熊本県印刷センター協業組合 デザイン/松永 社デザイン事務所

発行/熊本市現代美術館 〒960-0845 熊本市上通2-3

TEL.096-278-7503 FAX.096-359-7894